調査研究部会報告❶

ビブリオバトルを沖縄の図書館活動・読書推進にどう生かすか？

平成 27 年度沖縄県立図書館「図書館セミナー」の報告

山口真也・望月道浩・山内久江

■はじめに・セミナー開催の経緯

沖縄県図書館協会調査研究部会では、メンバーである山口と望月を中心として、平成 27 年度の活動の 1 つとして、沖縄県立図書館(研修室)において、2015 年 10 月 31 日(土)に開催された「図書館まつり」内のイベント「図書館セミナー」の運営に関わる機会をいただいた。「図書館セミナー」の今年度のテーマは「ビブリオバトル」であり、図書館関係者、学校関係者を招待して、大学生によるビブリオバトルの実演も交えながら、その意義や方法、課題をともに考える場として設けられた。

本稿では、当日のセミナーの様子を、時間の都合により不十分になってしまった部分を補足しつつ、セミナー後に実施したアンケート結果や参加者の感想もあわせて報告したい。

■第一部　ビブリオバトルってどんなもの？　（報告者：沖縄国際大学　山口真也）

(1)　ビブリオバトルの公式ルール

まず「ビブリオバトル」の概要について山口から報告させていただきます。と言っても、私自身は別にビブリオバトルの専門家という立場ではなく、2013 年に大学生の大会の地区予選の運営に少し関わったことがあるくらいなので、ここでは公式サイトや関連書籍の内容をもとに簡単に概要をまとめさせていただきます[1]。

「ビブリオバトル」とは、読書好きが集まって 5 分間で本を紹介しあい、「なぜこの本を読もうと思ったのか？」、「この本を読んで得たものは？」などのディスカッションを行い、各自が読みたくなった本 1 冊を選んで投票し、多数決で「チャンプ本」1 冊を選出する書評会です。

ビブリオバトルは「知的書評合戦」とも呼ばれていて、立命館大学准教授の谷口忠大氏が京都大学大学院時代(2007 年に)考案し、全国各地で開催されています。開催地は、書店や図書館といった本・読書に関わる場だけでなく、小中学校の教室(クラス単位で)、カフェ、ライブハウス、居酒屋、河原、山頂、古民家、同窓会、企業研修、婚活イベントなどにも広がっているそうです。このほかにも、立命館大学では「英語でビブリオバトル」、大

---

[1]「知的書評合戦ビブリオバトル公式サイト」http://www.bibliobattle.jp/, 2015.10.24 アクセス、谷口忠大『ビブリオバトル 本を知り人を知る書評ゲーム』(文春新書), 文藝春秋, 2013、ビブリオバトル普及委員会編著『ビブリオバトル ハンドブック』子どもの未来社, 2015、粕谷亮美・谷口忠大『ビブリオバトルを楽しもう―ゲームで広がる読書の輪』さ・え・ら書房, 2014、ビブリオバトル普及委員会・吉野英知編著『ビブリオバトル入門―本を通して人を知る・人を通して本を知る』情報科学技術協会, 2013

阪市立図書館では中学生、小学生限定で、ビブリオバトルと漫才を組み合わせたイベントも開催されています。先ほどルールを説明しましたが、開催地の地域性や利用者の属性をふまえてルールをアレンジすることもできるようです。

全国の大学生を対象とする全国大会(首都決戦)は 2010 年から開催されており、今年も 12 月に開催が予定されています。「全国高等学校ビブリオバトル」は、以前は関東大会と関西大会が別々に開催されていましたが、2015 年 1 月にはじめて全国大会が実施されています。文部科学省による「第三次子どもの読書活動の推進に関する基本計画」の中でも「全国に普及することが望まれる」と触れられていますので [2]、今後、学校現場での取り組みもさらに盛んになっていくものと思われます。

(2) ビブリオバトルの効果

「ビブリオバトル」にはどのような効果があるのでしょうか。もともとは楽しいゲームですので、あまり教育的な効果は求めないほうがよいという意見もあるのですが、よく指摘されることとしては次のような効果が挙げられます。

❶ 孤独な営みになりやすい読書の面白さ・楽しさを共有する。

読書の中にはもちろんプライバシーも含まれますが、その一方で、面白かった本のことは誰かに話したいと思うことも自然なことです。ただし、本の感想を語り合う場所はそれほど多くはありません。ビブリオバトルがその場所の 1 つとして期待されています。

❷ 人を通して本を知る。

ビブリオバトルのキャッチコピーとしてもよくつかわれるフレーズです。これは、身近な知人・友人を通して新たな本と出会いを広げ、世界を広げていく、ということです。1 人 1 人の読書の世界は意外に狭く、「この人が面白いと言っているなら読んでみようかな…」という気持ちになることで、読書の世界はますます広がっていきます。

❸ 本を通して人を知る。

これもビブリオバトルのキャッチコピーの 1 つです。例えば、会社の同僚同士、クラスメイトなど、同じコミュニティで生活を送ることになったけれど、お互いのことをまだよく知らない、という微妙な時期があります。ビブリオバトルは本のことを語りつつ、自分のことを語っている面もありますので、そうした時期に開催すると、自己紹介代わりになり、人間関係が深まると言われています。また、お互いのことをよく知った仲間内でも、人が他人に見せる顔というのはごく一部ですので、ビブリオバトルを通して意外な一面を知ることができるかもしれません。

❹ 本を通して想いを伝える。

この効果にはいろいろな捉え方ができると思いますが、本日は学校関係者、図書館関係者が多いので、「教育」という観点からとらえてみたいと思います。先ほども言いましたが、ビブリオバトルは本を語りながら、自分自身を語っている部分が多々あります。本を語りながら、自分を語ることは自分自身を見つめなおしていく作業にもつながります。そうした「自分語り」の機会を提供することは人の自立・成長を支援するという教育の大きな役割につながってくると思います。そういう意味で、学校や公共図書館がビブリオバトルに取り組むことには、教育的な役割が期待できるのではないかと思います。

(3) ビブリオバトルの種類・方法

ところで、ビブリオバトルの話を図書館関係者にすると、「楽しそうだけどいざやるとなると結構大変そう…」という声もよく耳にします。実は私も「ビブリオバトルをやりませんか？」と声をかけていただいたときには同じような気持ちになりました。確かに、ビブリオバトルの全国での取り組みを調べてみると、図書館での取り組みとしては、大掛かり

---

[2]「第 5 章 子どもの読書活動の推進のための方策 V 普及啓発活動」『第三次子どもの読書活動の推進に関する基本計画』文部科学省, 2013, p.26

なイベントの写真や開催情報とか多く出てきます。しかし、そうした大規模イベントだけがビブリオバトルではありません。

「お気に入りの１冊とカウントダウンタイマーさえあれば、いつでも・どこでも・だれとでもできるのがビブリオバトル」という言葉もあります。①イベント型というのはビブリオバトルの種類の１つにすぎません。他にも、②少人数によるコミュニティ型、③ワークショップ型、というのがあるそうです。

少人数によるコミュニティ型とは、ビブリオバトルの原型とも言えるものだと思います。気心の知れたメンバーが集まってやりますので、イベント型のような緊張感もありませんし、ビブリオバトルの楽しさを知るにはまずこの形がいいのではないでしょうか。なお、この後、予定している大学生による実演ではこのコミュニティ型を楽しんでやっている様子を皆さんに見てもらう予定です。

もう１つのワークショップ型は、コミュニティ型を学校のクラスなどで複数同時進行する形式をイメージしてもらえばよいと思います。教室の前にカウントダウンタイマーを映し出して、5 人ずつくらいで机を寄せ合ってやってみるというような方法です。ビブリオバトルの最適な人数は 5～6 人くらいと言われていますので、クラスで取り入れるにはこの方法がベストではないかと思います。

(4)　県内での実施状況

最後に、沖縄県でのビブリオバトルの開催状況をご紹介します。

2013 年には、私のゼミの学生も参加して、大学生のビブリオバトル大会の予選会が県内で行われています。この時は、沖縄国際大学と琉球大学図書館、さらにジュンク堂でそれぞれ予選会が行われました。全国大会への参加をかけた県大会はジュンク堂で行われ、沖縄国際大学の学生が参加しています[3]。

【ビブリオバトル全国大会の様子、YouTube より】

同じ頃から、県立高校の司書である手登根千津子先生が、北部地区の高校司書の方々を集めてビブリオバトルを行っておられます。この取り組みのユニークな点は、「高校生に勧める本」というテーマで職員研修として開催されている点です[4]。

【県立高校では職員研修の一環として実施】

2014 年 11 月には、うるま市の中学校の図書委員の代表が「うるま市読書活動フェスティバル」というイベントの中でビブリオバトルを行っています[5]。このイベントは数年に 1 回しか開催されないため、今後、ビブリオバトルを継続するかどうかはまだ決まっていな

---

[3] 予選会の様子は、伊波恵理奈＋文化情報学研究室「ビブリオバトル　沖縄国際大学予選会実施報告・感想レポート」『沖縄県図書館協会誌』第 17 号, pp.90-93 参照。

[4] 取り組みの様子は、手登根千津子(執筆代表)「学校司書で取り組んだビブリオバトル大会」『沖縄県図書館協会誌』第 18 号, pp.80-84 参照。

[5] イベントの様子は、仲宗根里菜「うるま市読書活動フェスティバルに参加して」『沖縄県図書館協会誌』第 18 号, pp.89-92 参照。

いそうですが、このイベントの主催者の１人である市立東中学校の司書、座間味利美子先生のお話では、東中学校ではその後も図書委員同士のビブリオバトルが継続的に行われており、図書委員会行事として定着してきているそうです。

【うるま市読書フェスティバルの様子】

高校生によるビブリオバトル大会も昨年度から全国大会の予選会が県内でも行われるようになっています。県立泊高校の梅野誠先生が事務局担当となって、今年も 11 月 11 日に地区大会が開催されることになっているようです。

このように県内でも少しずつ取り組みが広がりつつありますが、調査研究部会が把握できたのはこの４つの取り組みだけでしたので(他にもあるかもしれませんが)、県外に比べるとまだまだこれから、という状況とも言えるかもしれません。

本日は「セミナー」ということで、これから「うちの図書館でも」「うちの学校でもビブリオバトルをやってみようかな？」と思っている方が多いと思います。私の前座はこのくらいにして、大学生によるビブリオバトルの実演を見ていただきたいと思います。

■第二部　ビブリオバトルの実演
（沖縄国際大学　図書館情報学ゼミ生）

これから、沖縄国際大学の図書館情報学ゼミに所属している学生５人(＋司会１人)によるビブリオバトルを実演いたします。

まず「設定」をお伝えします。先ほどもお伝えしましたが、本日の実演は「イベント型」ではなく、「少人数によるコミュニティ型」でのビブリオバトルを見ていただきたいと思ってこういうセットを組んでみました。

これから、こちらにいる学生たちに、「図書館情報学ゼミの研究室で、月に１回の「定例ビブリオバトル」を楽しんでやっているという設定で、実演をしてもらいたいと思います。こちら側が研究室で、皆さんとの間には壁があることになっています。ただし、会場のみなさんにも参加していただきたいので、みなさんは、“研究室で面白そうなことをしているので、それを廊下の窓から覗き込んでいる野次馬”という設定で参加していただければと思います。本日、こちらにいる６人はリハーサルを授業の中で何度かしてきているのですが、発表からディスカッションまで全部シナリオ通りでは面白くないので、ビブリオバトルの醍醐味である「ライブ感」も大事にするために、発表後のディスカッションでは、「野次馬ですが～」という感じで、飛び入りで質問していただいても OK ということにします。そして、最後の投票も、ここにいる皆様全員にお願いしたいと思います。手元に投票用紙はお持ちでしょうか？

では学生のみなさん、普段通り楽しくやってください。では始まります。(寸劇風に始まります)

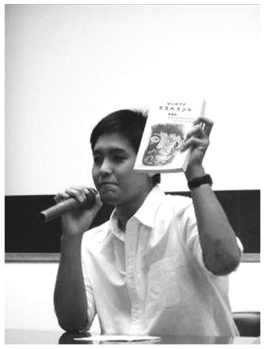
＜シナリオ＞

「ビブリオバトルの実演～ある日の研究室の風景」

(SE　授業終了のチャイム)
ナレーション：ここは沖縄国際大学図書館情報学ゼミの研究室です。研究室では 2 名が退屈そうにマンガを読んでいます。そこに、授業を終えた 4 名がノートやカバンをもって研究室に入ってきます。
(口々にあいさつを交わす)
学生 A「一、二、三、四、五、六…」
学生 B「はい、みんな揃いましたねー」
学生 C「みなさん、今日は定例ビブリオバトルの日ですが、本は持ってきましたか？」
学生たち「はーい」「前は○○さんがチャンプだったよね」「今日は負けないぞー」
司会「あ、いっけない！　私、本、忘れちゃった！」
学生 E「もー、○○さんったら、ドジなんだから」
学生 D「じゃぁ、○○さんは司会ね」
学生 B「1 人足りないけど、先生はやりますかー？」
先生「先生は観客でいいでーす」
学生たち「えー、先生もやればいいのに～」
司会「では、ビブリオバトルを始めます。私は司会・進行を担当する、○○○です。よろしくお願いします。今日の発表者は A さん、B さん、C さん、D さん、E さんの 5 人ですね。あ、なぜだか、今日は研究室の外の廊下からこっちを見てる人がいっぱいいますね」
(会場のみなさんのことです)
司会「じゃぁ、先生も含めて、残りのみなさんは「観客」ということでよろしくお願いします。はじめに、ビブリオバトルのルールを説明いたします。

○　本やエピソードを紹介するための小道具の使用は可能です。
○　レジュメの配布、読み上げレジュメの持ち込みは禁止です。ただし、本へのメモ書きや付箋の添付などは認められています。
○　パワーポイントなどのプレゼンテーションツールの使用は禁止です。
○　発表者は 5 名を予定しています。発表者は必ず 5 分を使い切ってください。このあとこちらのモニタにカウンターを表示しますので参考にしてください。
○　1 人の発表後にその本の内容や書評についてのディスカッションを行いますが、発表内容の批判をするようなことはせず、発表内容で分からなかった点の追加説明や、「どの本を一番読みたくなったか」を判断するための材料を得ることを目的としてください。
○　5 人の発表が終わった後、ここにいる全員でどの本がよかったか、投票していただきます。投票の基準は、書評を聞いてどの本が読みたくなったか、でお願いします。
○　チャンプ本が複数となった場合は決選投票を行います。

なにか質問はございますか？　では、はじめに書評の順番を決めていただきます。発表者はこちらの箱の中から 1 枚、カードを引いてください。
(1～5 までの番号が書いたカードを引いてもらう)
本日は 10 月 31 日ですので、1＋0＋3＋1＝5、5 番さんから発表をお願いします。発表する人はこちらに座ってください。では開始します。よろしくお願いします」
(SE　チーン)



(左上から、柳堀夏乃さん・玉城愛佳さん・上原健嗣さん・幸地真さん・瀬良垣杏さん・瑞慶覧千咲さん)
(5 分経過)
司会「○○さん、ありがとうございました。ここで 3 分間のディスカッションを行います。何か発表者に

聞いてみたいこと、感じたことなどはありますか？あれば挙手をお願いします。質問は観客の皆さんからしていただいても構いません」
(3 分経過)
司会「では時間になりましたので、これで○人目の発表を終わります。次の発表者の番号は、○○さん(発表を終えた人)が選んでください」
学生 A「○番」
司会「では○番さん、こちらにお願いします。(真ん中の席に移動)
(司会は発表を終えた人から本を借りて、脇のテーブルの上に立てておく)
(以上を繰り返す)

司会「これで 5 名の発表が終わりました。これから全員でどの本がよかったか、チャンプ本を決めるための投票を行います。では、今手元にあるこちらの用紙に、印象にのこった本の番号 A～E を 1 つだけ記入してください。発表者は自分の本は書かないようにしてください。廊下の外で見ていただいている野次馬のみなさんも良かったら投票してください」
(司会、全員が書き終わったころに)
司会「では投票をお願いします」
(投票が終わってから)
司会「ではこれから集計を行います。しばらく休憩してお待ちください」
(司会はいったん会場の外に出て集計)
司会「集計結果がまとまりました。今回の準チャンプ本は…この本です。おめでとうございます。おめでとうございます」
学生たち(拍手しつつ)「やったー」「くやしぃー」「残念」「またやろうー」
司会「ではビブリオバトルはこれにて終了です。ありがとうございました」
(SE　授業開始のチャイム)

(※今回は、岡本信明著・川田洋之助『どんぶり金魚の楽しみ方 世界でいちばん身近な金魚の飼育法』池田書店, 2014 がチャンプ本に選ばれました)

■第三部　ビブリオバトルを図書館活動・読書推進にどう生かすか？

（対談：沖縄国際大学 山口真也×琉球大学 望月道浩、司会：沖縄県立図書館 山内久江）

山内：　学生のみなさん、ありがとうございました。観客の皆さまもディスカッション、投票にご参加いただきありがとうございます。ビブリオバトルの楽しさが伝わったのではないでしょうか？ 残り時間が少なくなってきましたが、セミナー後半は、ビブリオバトルを図書館活動や読書推進にどう生かすか、ということを、望月先生にも参加していただいて、参加者の皆様とともに話し合っていきたいと思います。ここからは進行役として、県立図書館・山内も加わります。よろしくお願いします。

山内：　ビブリオバトルは文部科学省による「第三次子どもの読書活動の推進に関する基本計画」の中で取り上げられています。ただし、その実施についてはいろいろな疑問や不安も寄せられています。図書館関係者の中にすこし批判的な意見があるとも聞いております。この対談では、そうした疑問をどう考えればよいか、を皆様と一緒に話し合っていきたいと思います。まず、望月先生から、ビブリオバトルへの一般的な疑問、批判について紹介いただけますか？

望月：　私自身がそう考えている、ということではないのですが…、本日はよくある疑問・不安を４点ご紹介して、ビブリオバトルの運営のご経験がある山口先生と本日参加した学生さんの意見も聞いたりしながら、皆さんと一緒に３つの論点について議論を深めていきたいと思います。

(1)　本を紹介し合うだけではダメなのか？（読書と競争はなじまないのでは？）

望月：　１つ目に取り上げたい疑問・不安は「チャンプ本を決める必要があるのか？」「本を紹介し合うだけではダメなのか？」ということです。ビブリオバトルについては、一所懸命準備した子どもがかわいそうだし、子どもたちはただでさえ毎日いろいろなところで競争に駆り立てられているわけですから、読書にまで競争を取り入れるのは反対、という学校関係者の声も身近に聞いたことがあります。チャンプ本を決めなくても、ビブリオバトルの効果は十分発揮できるのでは？、という疑問にどう答えればいいのでしょうか？

山口：　私自身も、読書は１人１人の営みで、「競争」はなじまない気がします。実はビブリオバトルは発表者のことを「バトラー」と呼ばないといけないのですが、バトラーという言葉はあまり好きではないので、今日は極力使わないようにしました。ビブリオバトルの運営委員会が出している本にも、なぜチャンプ本を選ばないといけないの？、という批判はたびたび寄せられるということは書いてあります。ただし、チャンプ本を選ばないと「バトル」というゲーム性がなくなってしまうので、チャンプ本はぜひ決めてほしいということが書かれています。「子どもが傷つくのでは？」「負けた子どもがかわいそう」という批判に対しては、「勝てなかった人への配慮もちゃんと盛り込まれているので心配は無用です」と書かれています。つまり、「ビブリオバトルでは、発表者ではなく「本」に対して投票をします。つまりルール上、勝つのは発表者ではなくて、自分が紹介した本ということになります。当然、負けたのも発表者ではなくて、自分が紹介した本ということになります。(中略)負けたときには「紹介した本がイマイチだった」という気持ちの逃がし場所がある」のだそうです[6]。

望月：　実際にビブリオバトルを経験した学生たちはどう感じているのでしょうか？

学生Ｆ：　そうですね…。公式ルールでは、チャンプ本を選んでいるだけで、人を選んでいるわけではないから、チャンプになれなかったら、本を替えてまた頑張ろう、という前向きな気持ちになる、と説明されているということですが、好きな本を紹介しているだけに、「本がイマイチだった…」と本のせいにするのも気が引けます。結局は、自分のスピーチ力、アピール力、語彙力などに責任を感じてしまうと思います。チャンプ本を選ぶことは絶対ダメ、とまでは思いませんが、小さな子どもたちがやるときは、選ばれなかった人へのあとからのフォローが大事だと思います。

---

6 ビブリオバトル普及委員会編著『ビブリオバトルハンドブック』子どもの未来社, 2015, p.16

山口：　フォローが必要ということですね。…確かに、今回、実演をしてくれた5人を選ぶために授業の中で予選会を開いたのですが、その時、フォローになっていたか分かりませんが、チャンプ本じゃなかった学生には、「先生はこの本に入れたんだけどなぁ」とさりげなく言ってみたりしました。あ、これは嘘じゃないですよ。あと、ビブリオバトルは上位1名しか発表しないので、さりげなく、「どの本にも票が入っていたんだけどね」と言ったりしたような気もします。あ、これは嘘です。ごめんなさい。でも、そういう教育的なフォローはさりげなくあった方がいいかなぁという気はします。気を使いすぎでしょうか…。

望月先生：　無理やりまとめると、競争がもつプラスの面とマイナスの面があるということでしょうか。これは教育の永遠の課題のような気もしますが、いま学生さんから小学生の話がでていましたので、小学校での担任としてのご経験が長い司会の山内先生がどう思われるか、教えていただけますか？

山内：　小学生は単純にゲーム性があった方が盛り上がるのではないかと思います…。「チャンプ本」を目指すという目標を持たせることで、スポーツ的なゲーム感覚が得られ意欲的に取り組めるのではないかと考えます。今日の実演を見てビブリオバトルは、紹介本の良さや楽しさをグループで共有すると共に、表現力やコミュニケーション能力を育成し、国語力の向上を図ることのできる手法だと感じました。

望月：　バトルという言葉に不安を抱いてしまうところがありましたが、小学生の間では、さまざまなアニメのキャラクターのバトルカードなるものが流行っていますし、様々な読書活動の一つとして、子どもたちに読書への興味を誘うキャッチコピーとしては有効かもしれませんね。山内先生、ありがとうございました。

(2)　どのようなメンバーが適しているのか？　同世代？、異世代？

望月：　２つ目の論点はメンバーの構成について、です。公共図書館でイベント型としてビブリオバトルを実施する際に悩みになってくるのが、同じ世代で集まった方がよいのか、色々な人が集まった方がよいのか、ということではないかと思います。同じ世代が集まって本を紹介する方が読書興味が近いので盛り上がりそうですが、反面、読んだことがある本ばかりを紹介し合うような気もします。実際に、昨年、うるま市での各学校の図書委員の代表選でのビブリオバトルでは、全く同じ『妖怪アパート』の本を2人が紹介していました。逆に、70歳の男性と13歳の女子中学生が同じテーブルに座っても、世代が違いすぎても読書興味が重ならない気もします。

山口：　個人的には、イベント型ならば、発表者だけでなく観客もある程度は世代を限定してやった方が「読書推進」という意味では効果があるのかな？、と思いました。私も昨年のうるま市での中学生のビブリオバトルを見せてもらいました。中学生のプレゼンテーションそのものは凄く面白かったのですが、やはり 40 過ぎのおじさんが中学生が好きな本(ライトノベルなど)を読みたくなるか、というとちょっと難しい気もしました。今回の実演に向けての授業の予選会でも、受講生 9 人を2つのグループに分けたかったので、私も入って予選会を行ったのですが、私1人が圧倒的におじさんでしたので、私が紹介した本を読みたくはならなかったと思うんですね。ちなみに私は、こちらの『スケバン刑事』、じゃなくて、2代目スケバン刑事を演じた、80年代のアイドルの南野陽子さんの名エッセイ『月夜のくしゃみ』(角川書店, 1989)を紹介しましたが、学生は、しーん、としていました。

望月：　同じ世代で集まった方が楽しいということですね。ただし、同世代だけで集まってやってみると、お互いにすでに読んだことがある本ばかりにならないか、という問題も出てこないでしょうか。ビブリオバトルでは、最終的には、プレゼンの上手下手ではなく、読みたくなった本を 1 冊選ぶわけですから、知っている本を紹介しあう可能性が高い同世代の場合、ゲームの前提が成立しませんし、

もっと言えば、先ほども言いましたが、紹介する本が 5 人の中で被る危険性もありますよね。でも、異世代でやると読書興味が重ならない、おじさんからアイドルのエッセイを紹介されたりする…、読書推進という面だけで考えるとちょっと無理のあるゲームのようにも感じます。でも、知っている本を紹介されたとしても、また読んでみよう、という気持ちになることもあるのでしょうか。

山口：　実は私は今回、学生が紹介した本の中で 1 冊だけ、東野圭吾さんの『どちらかが彼女を殺した』(講談社文庫, 1999)は読んだことがありました。ただ、紹介した学生さんがディスカッションの中で会場からの質問に対して答えた、「中学生の頃はどちらが犯人なのか、しか気になっていなかったけど、今回、再読してみて、確かに犯人はこちらの人だけど、もう 1 人は犯人じゃないと言えるのか、考えてしまった」という感想はとても興味深かったです。自分が読んだことがある本でも、新しい読み方ができる、そういう紹介のされ方をしたら、再読してみたくなる、という意味で 1 票入れることもあるかもしれません。ちなみに私は今回は、『どちらかが彼女を殺した』に 1 票入れています。

望月：　なるほど。では、会場の皆さんに少し聞いてみましょう。同世代でやるのがいいか、色々な人が集まってやるのがいいのか？…と言ってもなかなかご発言は難しいかもしれませんので、挙手をお願いできますか？

望月：　だいたい半分くらいでしょうか。両方、手を挙げている方もおられましたね。強引にまとめますと、異世代、同世代、それぞれにメリットがあるということになるでしょうか。ちなみに、「読書推進」というところから少し離れて、広く図書館サービスの、社会教育としての機能を考えると、異世代で実施する場合、日常生活でなかなか交流できない世代の人と触れ合う機会になるという効果もあるのかなと思います。読書推進か、また別の目的か、イベントの位置づけをしっかり考えて取り組むべきなのかなと思います。

(3)　読書のプライバシーについて気を付けるべきことはないか？

望月：　次の疑問・課題は、プライバシーの問題です。いま、「図書館戦争」という映画が公開されていますが、その中に出てくる、「図書館の自由に関する宣言」という、図書館関係者ならよく知っているガイドラインがあります。この宣言には「利用者の秘密を守る」という原則が出てきます。伝統的に図書館界では、利用者の読書を「秘密」として保護してきた経緯があります。ビブリオバトルは自分が好きな本を積極的に人に伝えて、本の紹介を通して、自分自身もさらけ出すような部分がありますが、この宣言とちょっとなじまないのではないか、という疑問もあるように思いますが、このことについてどのように考えればよいでしょうか？　参加した学生さんから何か意見はないでしょうか？

学生 G：　読書には自分の趣味が反映されるので、それを他人に伝えるのはかなり恥ずかしいかもしれません。例えば、ラノベだったり、同人誌だったり、BL だったりすると、本当にその本が好きでもビブリオバトル向きじゃないと思うかもしれません。特に、今回のように、ある程度顔見知りの関係だったり、クラスメイトという微妙な関係だったりすると、知らない人に伝えるよりももっと慎重になるかな、とも思います。反対に、イベント形式で、会場にいる人がほとんど知らない人の方が、一生会うことのない人たちだから、好きな本を正直に紹介できるような気もします。人間関係がこの後続いていくような場で

の本の紹介のときは、心の内が読まれないように、当たり障りのない本を選んでしまうような気がします。
望月：　自分と相手との関係性によってプライバシーの感覚が変わるということですね。なるほど。
山口：　いま学生さんの発言を聞いていてふっと思ったのは、人は変わっていく生き物なので、恥ずかしさの感覚も変わるんじゃないか、ということです。小学校の司書の方に聞いたことがあるのですが、図書館のカウンターで接していて、子どもは昨日と今日で別人みたいに見えることがあるらしいんですね。例えば、ある女の子が、昨日まで面白がっていた占いの本とかを、次の日から「ふん」という感じで見向きもしなくなる、ということがあるそうですね。つまり、成長するにつれて、自分が過去にこんな本を読んでいたんだ、ということが恥ずかしく、子どもっぽく感じることもあるかもしれません。いま、ヨーロッパで「忘れられる権利」が認められつつあります。グーグルの検索結果から、過去の犯罪歴などが表示されないようにする、という判決が出されているそうです。公共図書館でビブリオバトルを実施した際に、よくその結果がサイトに公開されているのですが、顔写真だけでなく、名前、読んだ本も載っていることが多いです。もちろん本人とか保護者の同意がその瞬間はあっても、ずっとそれがネット上に残っているとどう活用されるか分からない怖さもあると思います。図書館、学校のイベントとして行う際には、ネットへの情報展開にあたっては、参加者の自己責任とせずに、個人情報を守ための対策は必要かなと思います。
望月先生：　確かに、ビブリオバトルのイベントは YouTube にもよく公開されていますが、その点は何らかの注意が必要になるかもしれません。ビブリオバトルは、ブックトークと異なり、個人の想いが強く顕れてくる活動でもあり、ゲーム性ともあいまって思わず自分の内面をさらけ出してしまうということもありますね。主催する側の配慮として、例えば､インターネットに情報をあげる際には、タイトルを伏せる…というのはチャンプ本を選んでいる性質上難しいかもしれませんが、写真は載せるけど、名前は載せない、名前は載せても本と対応しないようにする、といった工夫はあってもよいかもしれませんね。このような主催する側の配慮というのは、まだあまり認識されていないかもしれませんので、気を付けたいところですね。

(4)　公共図書館への提案　（山口より）

山内：　対談で盛り上がってしまって、残り時間が少なくなってきました。いまいろいろ議論をしてきたように、ビブリオバトルには疑問点、不安な点もありますが、図書館活動や学校での教育活動に生かすとしたらどんな形がよいのでしょうか。本日のセミナーをまとめるような形で、お二人の先生にご提案していただきたいと思います。まずは公共図書館への提案を山口先生からお願いします。

❶　公共図書館の職員研修としての実施

公共図書館への提案❶

- 今回のイベントに向けて、授業では「本を紹介するスキルを高める」(ブックトークスキルの向上)という目的を設定してビブリオバトルを取り入れてみた。
- 北部地区では職員研修として「高校生に勧める本」というテーマで学校司書同士のブックトークを開催。
- 利用者を意識して面白く本を紹介する練習の場として、いろいろな本を知る(資料知識を広げる)、という意味で、公共図書館の館内職員研修として有効では？
- 公共図書館は「チーム」で仕事をする。お互いを知る機会にもなるのでは？

山口：　冒頭でビブリオバトルの効果をご紹介しましたが、そこには読書推進という目的だけでなく、中高生、ヤングアダルト層に自己認識、自己表現の場を与える、といった教育的な効果もあると考えられていますので、イベント型ももちろんどんどんやっていいと思います。ただ、いまの公共図書館はただでさえイベントが多いですよね。事前に参加を呼びかけて、当日どのくらいのお客さんが来てくれるか心配で眠れなくて、１つ１つのイベントに十分な準備の時間もとれないままイベントが始まってしまって…、ということに

もなりかねません。

ですので、いきなりイベント型のビブリオバトルを開催するのではなく、まずは図書館員自身がその面白さを体験する、というところから始めてみてはどうかな、と思います。冒頭で紹介しましたが、北部地区の高校図書館では、学校司書が集まって「高校生に勧める本」というテーマでビブリオバトルを開催しています。公共図書館でも、「子どもに勧める本」「大人にすすめる本」「ビジネスマンにすすめる本」といったテーマを決めて、職員研修の一環として取り入れてみたら、①ブックトークのスキルも身につきますし、②この図書館にはこんな面白い本があったんだ、という、資料知識を深める機会にもなってくると思います。

それともう１つ、公共図書館はチームで仕事をしないといけませんが、もともと司書を目指す人はさっぱりした人(？)が多いので、お互いのことをあまり知らなかったりしないでしょうか。ビブリオバトルを通してコミュニケーションをはかることは、チームで仕事をする図書館現場にはよい影響が出るのではないでしょうか？　職員研修として取り組んでみる、職場の人間関係作りのために取り組んでみる、ということを第一に提案させていただきます。

❷　司書の専門性を伝える場として活用

公共図書館への提案❷

- 利用者が参加するイベントとして開催するメリットはいろいろあると思うが、利用者だけが参加するのでなく、司書も参加したイベントを開催してみてはどうか？
- 利用者とともに司書も加わる形でビブリオバトルをやってみることで、司書の専門性(ブックトークスキル、幅広い資料知識)を理解してもらえる良い機会になるのでは？
- 司書の存在を身近にも感じてもらうきっかけにもなるのでは？

山口：　もう１つの提案は、利用者参加型のイベントを開催する場合、そこに司書も加わってみてはどうか？、ということです。全国のイベント型のビブリオバトルでは司書が参加するとしても、司会という役割が多いように思います。でも、司書も本好きの１人ですから、発表者として参加してみるともっとイベントが盛り上がるのではないでしょうか？

厳しい時代の中で、司書という職業を専門職として残していくためには、利用者に今まで以上にしっかりとその専門性を伝えないといけないと思います。選書、分類、目録など、司書の専門性はたくさんありますが、テクニカルな部分は利用者に見えづらいという欠点があります。利用者＝住民に、司書の専門性を伝えるためにも、ビブリオバトルに参加してみてはどうでしょうか？

もちろん、司書は面白い本をいっぱい知っているので、利用者とバトルをすると、毎回司書が勝ってしまうかもしれません。利用者からすると面白くないかもしれませんが、逆にそうした「最強のチャンプ」がいて、その人を打ち負かそうと、色々な利用者がチャレンジしてくる、そういう利用者との関係性ができたら、それはそれで図書館の日常風景がとてもアクティブになるのではないかと思います。もしそういう機会があったら、私も利用者として参加したいなぁと思います。私からの提案は以上です。本日はありがとうございました。

(5)　学校現場への提案　（望月より）

山内：　望月先生には、学校図書館の委員会活動や利用者向けのイベント、または、学校でのクラスの取り組みなど、学校現場への提案をお願いします。

❶　系統的な読書指導・活動の手段として

望月：　学校や学校図書館でのビブリオバトルの実践については、冒頭の山口先生からの紹介にもありましたように、うるま市立具志川東中学校の図書委員会活動として 2013 年から継続開催されていますので、私がここで具体的にビブリオバトルの取り組み方の提案をするというよりは、学校教育のなかでビブリオバトルの活動はどのように位置づけられるのだろうか？という観点からお話しさせていただくことになるかと思います。

具体的には、児童生徒の実態を踏まえた系統的な読書指導・活動のどこにビブリオバトルを位置付けていけば良いのだろうか？ということです。

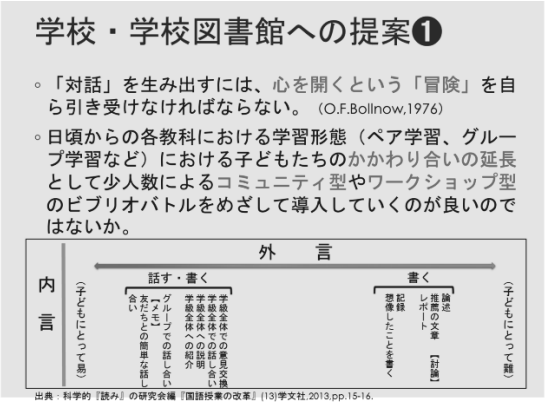
例えば、読書指導・活動にかかわり小学校や中学校の国語科の学習指導要領を見てみます。口頭で読み上げてみますが、小学校では、低学年で楽しんで読書しようとする態度を育て、中学年で幅広く読書しようとする態度を育て、高学年で読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てることが謳われています。中学校ではそれらをベースにしながら、読書を通してものの見方や考え方を広げようとすること、読書を生活に役立てようとすること、読書を通して自己を向上させようとすることといった態度を育てることが謳われています。小学校から中学校にかけての国語科の学習指導要領から見た場合ということになりますが、「児童生徒が主体的に本や文章にかかわる読書活動」が意図されていることがわかります。

あらためて、学校教育のなかでの系統的な読書指導・活動を振り返ってみたときに、ビブリオバトルが読書指導・活動の目的なのか手段なのかということは、常に考えていかねばならないことなのだろうと思います。具体的には、発表者同士のバトルを通してチャンプとなることが目的というよりも、ビブリオバトルを通して（あるいはビブリオバトルを終えた）、その先に子どもたちのどのような姿（変容）を想定して実施しているのかということを併せて考えておくことが大切かと思います。

ドイツの教育哲学者にオットー・フリードリヒ・ボルノーという人物がいます。ボルノーは、『問いへの教育』（O．F．ボルノー（森田孝,大塚恵一訳）『問いへの教育』（増補版）川島書店,1979 年,pp.192-198.）という著書のなかで、「「話す」と「聞く」の相互交渉の過程である「対話」には、一方で「開いた心」を必要とする」と述べ、「自らの考えを率直に述べるのは「冒険」である」ということを主張しています。ビブリオバトルもまた、「話す」と「聞く」の相互交渉の過程を伴う活動かと思います。今回、山口先生のゼミの学生のみなさんが実践していただいたわけですが、いかがでしたか？

ビブリオバトルでチャンプ本に選ばれるためには、時として自分自身の内面を語らなければ伝わらない（選ばれない）、と感じられたところはありませんでしたか？

ビブリオバトルは、発表者だけが舞台で演じるものではなく、参加者からの質問なども引き受けながらの相互交流にその魅力があるのだろうと思います。ボルノーのいう「「対話」を生み出すには、心を開くという「冒険」を自ら引き受けなければならない。」ということを踏まえつつ、学校でのビブリオバトルを考えてみると、パワーポイントに示したように「日頃からの各教科における学習形態（ペア学習、グループ学習など）における子どもたちのかかわり合いの延長として少人数によるコミュニティ型やワークショップ型のビブリオバトルをめざして導入していくのが良いのではないか。」というように、子どもたちが「冒険」を引き受けやすいような関係性を築いていくことが大切なのだろうと考えます。



出典：科学的『読み』の研究会編『国語授業の改革』(13)学文社,2013,pp.15-16.

これは、何もビブリオバトルのためにということではありません。言葉を介したやり取りは、日常生活においても必須の事柄であることは確かです。パワーポイントの下部に示した図のように、子どもたちがその内面（心）に秘めている思い（言葉）というものがあっても、それを外に出さなければなかなか相手

に伝えていくことは難しいということがあります。内言を外言化するという活動は、学校教育に閉じたものではなく、日常生活に開かれた活動であると考えることができます。外言化するには、さまざまな手段があるかと思いますが、ビブリオバトルも子どもたちが内言を外言化することを考え・体験できる手段の一つとして有効にはたらく可能性は高いかもしれません。

❷　言語技術プラス・アルファの活動として

先ほど、「かかわり合いの延長」としてビブリオバトルをというお話しをさせていただきましたが、学校や学校図書館で取り組むとなった場合に、とくに中学・高等学校段階で取り組む意義が大きいのではないかと感じています。

小学校段階であれば、担任教員と過ごす時間も長く、いわゆる縦割りといわれるような学年を越えた交流による学び合いも多いかと思います。学習形態もペアやグループでの学習が適宜実践されたりと他者とかかわり合う学びが多いのが小学校の特徴であったかと思います。

中・高等学校段階になると、各教科の内容が専門的になってくるということもあり、どうしても教科の枠というものが強く立ち顕れてきてしまいます。学年の枠というのも強まってくるかと思います。現に、教科セクト主義や学年セクト主義というように教科の枠、学年の枠に縛られてきたことの弊害として、批判されてきたことにも顕れているかと思います。教科を越えてのつながりであるとか、学年を越えてのつながりが、同じ学校のなかであるにもかかわらず意外に希薄であったために、子どもたちの学びも閉ざされてきたのではないかという課題です。

もちろん、これらの批判や課題については中学校や高等学校でもその改善に向けた取り組みが進められていることは確かであることは付け加えておきたいと思います。

それであればこそ、中学校や高等学校でビブリオバトルに取り組む意義は大きいとあらためて考えることができます。中学生段階の読書能力については、読書技能が成熟し多読や目的に応じた読書ができるようになる時期ということで「展開読書期」の後期にあたると指摘されています。これは、読書能力の発達段階研究で良く紹介される阪本一郎先生によって示されました。すでに、６０年以上経過した読書の発達段階研究であることから、現状に即しているとは言い難いとの指摘もありますが、読書の幅が広がり目的に応じて本を選択して読めるようになるという年代である可能性を持っているという点については、先に紹介した国語科の学習指導要領の読書指導とのかかわりからも明らかかと思います。

つまり、読書能力の発達段階と照らしてみても、ビブリオバトルの本質に迫ることを考えれば、中学校段階からが望ましいと考えますし、教科の枠や学年の枠を越えた学校教育のなかでの営みとして考えても、中学校・高等学校でビブリオバトルに取り組む必要性ということも感じられます。

蛇足かもしれませんが、数年前に小惑星探査機の「はやぶさ」が、小惑星のイトカワから微粒子を採取し、地球に帰還し話題になりました。映画化もされましたのでご覧になった方もいらっしゃるかと思います。優秀な研究者が「はやぶさ」の開発に携わったわけですが、「はやぶさ」のミッションは小惑星から微粒子を採取し持ち帰るということだけではなく、新たなロケットエンジンの開発でもあったわけです。そこに向き合うのは人間である研究者です。ちょっと極端な言い方になるかもしれませんが、ただ単に、新しいロケットエンジンの開発をしましょうと掲げても、そこにかかわる研究者のモチベーションは高まらないので、小惑星「イトカワ」に行って帰ってくることのできるロケットエンジン開発を求め、イオンエンジンという新しい技術を確立させました。つまり、小惑星「イトカワ」から微粒子を採取することが目的ではなかったわけです。新型ロケットエンジンの開発という目的のために小惑星探査をいう手段を選んだということになります。

本題にもどります。

学校教育における国語科などでは、小学校の段階から、おすすめの本を紹介し合う活動やリーフレット、パンフレット、新聞などの形態に調べたことをまとめる活動を通して、「聞く・話す・読む・書く」といったことを学び、思考を論理的に組み立て、相手が理解できるように分かりやすく表現することといった、多様な言語技術の習得をめざす学習が展開されていることと思います。

しかしながら、今、パワーポイントで示しているように、「言語技術は習得しているのに「話さない」子、「読まない」子、「書かない」子がいるのであり、実際に言語活動ができるためには、言語技術プラス・アルファが必要」ということも指摘されています。

学校・学校図書館への提案❷

- 「言語技術」は認識・思考や情動といった意識的活動や対人関係意識なども絡み合って働く
- 言語技術は習得しているのに「話さない」子、「読まない」子、「書かない」子がいるのであり、実際に言語活動ができるためには、言語技術プラス・アルファが必要

（科学的『読み』の研究会編『国語授業の改革』(10)学文社.2010,p.158）

↓

- 図書委員会活動として、学校図書館と各学級のパイプ役を担う広報活動の一 環として取り組むことで、学年（教科）を越えた読書活動の交流をはかることができるのではないか？
- 特に中・高校になると学年・教科の枠が強まってしまうので、ビブリオバトルを通して生徒間で主体的に交流を深める機会になるかもしれない。

生きてはたらく言葉を子どもたち自身のこと（自分ごと）として捉えなければ、せっかく習得した技術も宝の持ち腐れになってしまいます。小学校での学習を中学校・高等学校で生かし、生活に根ざしたものとしていくためにビブリオバトルの可能性として、中学校・高等学校段階で取り組む意義が高いのではないかと思います。

❸　「不便益」の活用

こちらのスライドをご覧ください。これは、学校・学校図書館に限ったことではありませんが、ビブリオバトルの取り組みについては、「不便益」というキーワードでとらえられている面もあります。

学校・学校図書館への提案❸

- ビブリオバトルにおける不便の益！？
- 「手間いらずで効率的に要求が満たせる『便利な道具』よりも、むしろ不便な道具を使うほうがうれしい」（京都大学デザイン学ユニット 川上浩司教授「不便益システム研究所」<http://fuben-eki.jp>）

↓

- 「不便益」というキーワードで考えると「いまだけ、ここだけ、ぼくらだけ」という限定的な不便さが参加者に「益（特別なうれしさ）」を与える可能性を秘めている。

山口先生より、第１部にて解説いただいたようにビブリオバトルは、「いつでも・どこでも・だれとでもできるのがビブリオバトル」ではあるものの、ビブリオバトルの楽しさやワクワク・ドキドキ感というのは、まさに今日、この場に集ったみなさんが一番感じられたところなのではないかと思うのですがいかがでしょうか？

先日、10 月 12 日（月・祝）の午後３時頃から午後５時頃にかけて、ＮＨＫラジオ第一で、東京八重洲ブックセンター本店からの公開生放送にてビブリオバトルが放送されていました。お聴きになった方もいらっしゃるかもしれませんね。午後３時台は「食べたくなる物語」、午後４時台は「食べたくなるノンフィクション」といったように「食べたくなる本」というテーマ設定のもとで実施されていたビブリオバトルでした。ビブリオバトルは、テーマ設定をした方が良いのかどうかという議論もあるかもしれませんが、ここではその議論は一旦置いておきます。話を戻しまして、ビブリオバトルがラジオで放送されていたわけです。リスナーからも、専用サイトから質問・投票が可能でした。ただ、個人的には本日のビブリオバトルのようにその場に参加しているのといないのとでは、ビブリオバトルの醍醐味のようなものが大きく異なっていると感じました。

Ustream や YouTube でリアルタイムにビブリオバトルの様子を配信することも可能ではあるかと思うのですが、それではやはりビブリオバトルの本質には迫れないのではないかと感じるのです。そこが、ここで取り上げた「不便益」にかかわるところです。

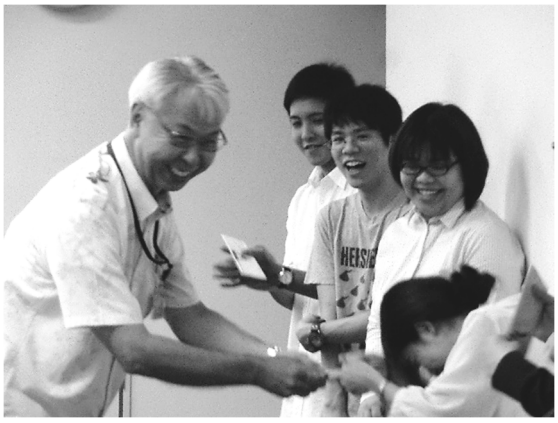
「不便益」については、京都大学の川上浩

司先生が、こちらのパワーポイントにも示したように、「手間いらずで効率的に要求が満たせる『便利な道具』よりも、むしろ不便な道具を使う方がうれしい」のだということを主張されています。たとえば、最近、ＩＨ炊飯器が進化してとてもおいしいお米が炊けるようになっていますよね。一方で、土鍋で炊くお米にも注目が集まっています。確かに、土鍋で炊くのは手軽ではありませんし、ちょっと不便ではありますが、炊きあがったご飯はおいしいんですよね。私が炊いたわけではありませんが。まさに「不便益」の一例かと思います。

ビブリオバトルもネットやラジオでリアルタイムに配信しながら実施することもできるわけですが、場を設定して人々がそこに集まって対面しながら展開するという不便さが、逆に面白さや楽しさに結び付いているのだと思います。ウェブ上の SNS などで知り合った人々が、わざわざオフラインミーティング（オフ会）を開催するのもオンライン上だけでは得らない要素を実感されているからなのだろうと思います。読書の新たな楽しさを発見するきっかけとして、ネットや新聞などの書評欄も良いのだけれど、このようにみんなが集まって展開するビブリオバトルが注目されている背景の一つには、その場に集まることの不便さが、逆に有効に働いていることの証左なのだろうと思います。

具体的な提案というよりも、ビブリオバトルについてあらためて振り返ってみた個人的な感想を述べた程度になってしまいました。繰り返しになるかもしれませんが、ビブリオバトルを通して子どもの姿がどう変わったのか、図書館は楽しい・大好き、本は楽しい・大好き、ということもめざしたいところですが、学校というところにおいては、かかわり合う学びの手段としてビブリオバトルをいかに活用していくべきか、子どもの実態に即しながらみていくことも大切ではないかと思います。私からの提案は以上の 3 点です。本日はありがとうございました。

山内：　望月先生、ご提案、ありがとうございました。最後に本日、ビブリオバトルの実演に協力してくれた学生の皆さんにもっと読書に親しんでもらいたいということで、沖縄県読書推進運動協議会より記念品(図書カード)を、県立図書館館長・城間盛市よりお渡ししたいと思います。



山内：　本日は沖縄国際大学の図書館学ゼミの皆さんの他に、琉球大学の望月先生の教え子のみなさんにも受付、会場設営などをお手伝いしてもらいました。学生の皆さん、講師の先生方にもう一度大きな拍手をお願いして、平成 27 年度図書館セミナーを閉じたいと思います。本日はありがとうございました。

■おわりに・アンケート結果の分析

今回のセミナーは、沖縄県図書館協会調査研究部会の調査活動の一環として運営に協力させていただいた。セミナー終了後には、参加者の皆様に、第三部の対談のテーマにからめた調査研究部会からのアンケート調査への回答も依頼している。最後にアンケートの結果を紹介したい。(セミナー参加者 40 名(関係者、参加学生を除く)、有効回答数 23、回答率 57.5%)

Q　あなたは、図書館セミナー「書評合戦(ビブリオバトル)」に参加してみて、主催者としてビブリオバトルを実施してみたいと思いましたか？

①実施してみたいと思った。　18（78%）
②実施してみたいとは思わない。　2（8%）

③どちらともいえない。　2（8%）
④無回答　1（4%）
➡その主な理由：
「人が集められない」「少人数（4～5 人）ならやってみたいと思ったが、大規模ならなんか大変そうと思ったから」「大規模なものは大変そうだけど、少人数の仲間内だけでやるのはいい」「やはり率直に、本の面白さ、魅力等がユニークなかたちでそれぞれ違った感じで聞き手に伝わるから」「中学生に、自分のおすすめ本を選ぶこと。読みとること。それを他の人にすすめるために、表現や言葉を選ぶこと。実際に発言する(語る）ことで、コミュニケーション（伝える力）を育てることができると思う)「地域の方とも連携しつつ、人を知ることもできるので、選書もしやすい環境となると思います」

Q　あなたは、図書館セミナー「書評合戦(ビブリオバトル)」に参加してみて、発表者として参加してみたいと思いましたか？
①参加してみたいと思った。　13 (56%)
②参加してみたいとは思わなかった。1 (4%)
③どちらともいえない。　9 (39%)
④無回答　0（0%）
➡その主な理由：
「実際に見てとても楽しそうだったし、又、自分自身本を読み返す機会や新たな発見になると思ったから」「すすめたい本に共感がえられることは楽しいことだ」「自信がない」「本を紹介できるのは良いことだけど、発表して意見を言い合うのは自分は苦手だなと思ったから」「本の紹介を聞くのはとても楽しかったので、やってみたいと少し思ったけど、規模によるかなと思った」「自分が愛読している作家の本をぜひ伝えていきたいから」「分のおすすめ本をどのように紹介できるか、体験してみたい」「本の面白さも伝わる中、その人の熱意、人格も表現できるので挑戦してみたい雰囲気でした」

Q　あなたの職場で「書評合戦(ビブリオバトル)」を実施する場合、どのような形式がよいと思いますか？　(複数回答可)
①イベント型　7 (30%)
②コミュニティ型　14 (60%)
③複数テーブルによるワークショップ型　8 (34%)
④職員研修型(司書、教員、図書委員が集まったコミュニティ型)　4 (17%)
⑤その他(こんなふうにやってみたいという提案はございませんか？)　0（0%）

Q　その他、図書館セミナー「書評合戦(ビブリオバトル)」に参加してみて、ご意見ご感想などございましたらご自由にお書きください。
「非常に面白かったです！質問ばかりしてすみません。『ムシウタ』と投票迷いました。(甲乙つけがたかったです)十二国記とか最初はライトノベルの範囲だったけど今は一般小説だった。ライトノベルと一般小説の差を質問したかったと後で思いました」「本をすすめられて読むという生活は重荷にもなるが、より確実によい本に出会える方法でもある」「学生さんのみなさんおつかれ様でした」「勉強になりました。同世代でやった方がいいのあかなぁ？」「本の話しをききあう場に居ることができて心地よかったです」「本を介して人と人がつながる取組(手段)だと思います」「頑張ってください！」「本は小さいので、実践中は後方のスクリーンに写していてもらいたい！」「学校で実践するには、ビブリオバトルというよりも、ビブリオトーク、ビブリオバトルと段階を踏むとよいかと思う」「来年も企画をお願いします」

やまぐち　しんや：沖縄国際大学
もちづき　みちひろ：琉球大学
やまうち　ひさえ：沖縄県立図書館